

平成19年度甲子園監督研修報告

常任理事 寺澤 誠一

平成10年に始まった甲子園監督研修も今回で10回目。意欲溢れる3名の若き指導者と両角監督部会長と共に本年も灼熱の甲子園研修に参加した。

甲子園球場は、2010年3月完成を目指し、10月からリニューアル工事が行われるとあってか、正面入口及びライト側の蔦は既に取り除かれ写真に変わっていた。レフト側に残る蔦を見ながら、平成12年の第82回大会抽選会で蔦と甲子園の土が加盟校に配られたことを思いだし、加盟校の蔦の状態が気になった。

研修二日目に南港中央野球場で行われた仙台育英学園高校の練習を視察。榎部長にお願いして、室内投球練習場での佐藤投手の投球を観ることが出来た。また、球場職員の計らいで暑さを気にすることなく、バックネット裏本部席から練習視察を行うことも出来た。研修中は、特別入場章により甲子園球場でも関係者以外立ち入りの許されない場所へ自由に出入り出来るが、これも県連盟主催の監督研修ならではの魅力の一つである。今回は、甲子園球場内の施設や設備の案内をしていただく機会が持てなかったが、駒大苫小牧―広陵戦を始め緊迫感のある試合観戦等を通して、本研修の目的は充分達成されたと思われる。

最後に、例年のことながら本研修実施にあたりご尽力いただいた朝日新聞笠原長野総局長、選手権大会の本部員としてお忙しい中、快く迎えて下さった奈良井常任理事を始め連盟関係者に深く感謝申し上げたい。

1. 期 間

平成19年8月10日（金）～12日（日） —2泊3日—

2. 場 所

阪神甲子園球場（兵庫県西宮市）
南港中央野球場（大阪市住之江区）

3. 内 容

10日	試合視察	甲府商業 — 境
		花巻東 — 新潟明訓
11日	練習視察	仙台育英
	試合視察	東福岡 — 桜井
		駒大苫小牧 — 広陵
		インタビュー・理学療法士サポート
12日	試合視察	青森山田 — 報徳学園

4. 参加者

栗原和之（北信支部 長野南） 飯島昭久（東信支部 望月）
壬生雅教（南信支部 阿智）
両角亮介（本県連盟常任理事 監督部会）
寺澤誠一（本県連盟常任理事 責任者）

今回、北信の代表としてこの研修に行かせていただきました。普段は立ち入ることの出来ない場所や、出場校の練習も拝見させていただくことが出来ました。仙台育英高校の佐藤投手のブルペンを覗くこともできました。とても有意義な時間となり、連盟の関係者の皆様方に感謝いたします。

今回のレポートは、私が感じた項目毎についてまとめてみました。

◎ スピード

・全力疾走・走力・投球速度・スウィングスピードはもちろんですが、ゲームの進行の速さには正直驚きました。普段の練習や、練習試合などから素早い行動をとっておくようにしないと、ゲームそのものの流れに負けてしまい、持っている実力を発揮することのないまま終わってしまうと感じました。

なかでも特に目を引いたことは、バッテリーの無駄な動きが全くないという点でした。投球→捕球→返球→次の投球モーションへの移行。捕手は返球と同時にサインを出し、投手はボールを受けると同時に投球動作に入ってきます。10秒間に2球を投げる間隔ではなかったかと思います。守備側からすると、守りのリズムが作りやすくなります。もちろん、どの打者もその投球間隔に対応できています。攻撃のサインは、首を向けるだけ、打席内にある足でさえ動かしません。日ごろの行動から対処しておかねばなりません。

広陵高校の野村投手のリズムの速さ、一定さが印象的でした。守備がとても鍛えられている同チームですが、その第一歩は、バッテリーが作り出すリズムを感じられるからだと思いました。

仙台育英の佐藤投手は150kを投げます。そのほかの学校でも2・3番手の投手が平気で130k後半のストレートを投げていました。飯島先生と、どうしたら速い球を投げられるようになるのかを話し合いましたが、結論は出ませんでした・・・。

1人が投げられるようになると、似たようなフォームの投手がうまれ、同じような球速で投げることのできる投手が育つのではないかと思いました。仙台育英のブルペンでは、佐藤投手に劣らない球威をもつ投手が並んで投球していました。まずはどのように1人目を育てるかということですね。

◎ カバーリング

・当たり前のことですが、キャッチャーの内野ゴロカバー、ランナーがいるときの捕手からの返球カバー、バントの外野手のカバーなど、どのチームも確実に行っていました。カバーはやろうとさえすれば出来ること、しかし、抜こうと思えばやらなくても試合は進行していくものです。そんなプレーを大切に・確実に出来るチームが甲子園に勝ち進めるチームだと感じました。敗れはしましたが、駒澤大学苫小牧高校のカバーリングは見事です。キャッチャーは内野ゴロのカバーを、ファースト後方直線の位置まで確実に入り、セカンドもその場所にいます。ランナーがいる時二遊間は、投手後方で構えた姿勢で返球をカバーしていました。豪快な野球のイメージがあった駒大ですが、その影には基本をものすごく大切に、徹底的に指導されている部分が見てとれました。

◎ボール回し

・内野手の一番のポイントはボール回しの速さ・正確さということを再認識することができました。シートノックでの送球の正確さが印象的でどのチームも暴投はありませんでした。左右のゴロを捌くことよりも、正確で正しいスローイングができる選手が良い内野手の要素であると思いました。

花巻東高校のシートノックでは、同時に3つのボールを使ったボール回しなど「送球」に力を入れていました。また、一回戦勝利後の仙台育英高校の練習でさえも、ボール回しや送球にかなりの時間を割き、暴投後のベースカバーまで徹底して行っていました。調整練習とは違い、甲子園で勝つチームの雰囲気伝わってききました。

◎ 準備・判断・経験

・桜井高校対東福岡高校戦は、終始桜井高校のペースで進んでいきました。エースの調子もよく、球場の応援もすばらしく選手も好プレーで応えていました。しかし、中盤突然エースが足をつるというアクシデントに見舞われました。誰が見ても投手の交代は考えられない出来であったため、ブルペンでは誰も準備していませんでした。2番手投手は2年生で、地区予選でも2イニングしか投げていません。突然の登板も、9回までは完璧に抑えました。そんなことから、どのような状態でも不足の事態を考えた準備が必要であると勉強させられました。

9回裏、東福岡は1アウトランナー1・2塁としました。2点の差がある桜井にはまだ余裕さえありました。次打者の当たり損ねたピッチャーゴロを迷いながらファーストに送球したのです。この判断ミスがゲームの流れを変えました。たとえセカンドでなくても、せめてサードへ投げていれば……。ツーアウト2・3塁、ここで東福岡7番打者がセンターへ運び同点、延長11回押し出しでのサヨナラ負けを喫してしまいました。

大黒柱のエースのいるチームのアクシデントから流れが変わってしまうというこの試合、経験不足からおきた判断ミスで勝ちゲームを落としてしまった形になった桜井高校。この試合からも様々なことを学ぶことができました。

判断という点では、外野手の判断のよさも目に付きました。打球を処理する判断はもちろん、送球先の判断はクロスプレーをアウトに出来るかどうかです。カットに投げるのではなく、ベースに投げ、それをつなぐベストな場所に、カットマンが入っていました。

セカンドランナーの思い切った走塁も目に付きました。特に、前にランナーがいる場合1点は入っていますので、思い切ってホームを狙っていました。投手が注目された甲府商業ですが、走塁にもそつがなく、サードランナーの帰塁動作は、選手技術講習会で明治大学の学生から指導されたとおりの動きでした。

最後に……

オリンピックスタジアムをはじめ、長野県にも甲子園球場に匹敵する広さを持つグラウンドもあります。甲子園に出場するチームはとても手の届かないチームでもありません。あたり前の基本のプレーをおろそかにせず、どんな場面でも手を抜かず、いつでもどこでも緊張感の中でも、自分のプレーができることが大切です。敏速な行動を心がけ、いつまでも夢を追い続ける選手を育てて行きたいと感じました。そしていつかは甲子園のベンチでサインを送ってみたいと思いました。

平成 19 年度 甲子園研修報告書

望月高等学校 飯島 昭久

1、研修期間 8月10日(金)～8月12日(日)

2、試合・練習視察 甲府商業：境 新潟明訓：花巻東 桜井：東福岡
駒大苫小牧：広陵 青森山田：報徳学園 仙台育英（練習視察）

3、試合・練習視察報告

<甲府商業 対 境>

両チーム共に捕手の肩の良さ目立った。甲府商業の投手の急速は135km前後、境の投手は125km前後であったが制球力がとてもよい。

<新潟明訓 対 花巻東>

花巻東のボール回しは、ボールを複数使用しとても効率的で、しかもスピードがあり安定していた。ボール回し一つとっても鍛えられていた。新潟明訓は、スイングスピードが速く、打球スピードも速かった。また、両投手ともスピードと変化球の切れがよかった。

<桜井 対 東福岡>

打撃では、両チームのスイングが速かった。また、センター返しと右打ちがしっかりできていた。両チーム優勢の時には、足を絡めた攻撃をどんどん仕掛けてきていた。途中、桜井のエースが脚部痙攣をおこし急遽降板したが、次の投手の準備をしていなかったため失点してしまった。その失点が響き、敗退となった。

<駒大苫小牧 対 広陵>

とにかく、両チーム「走、攻、守」全ての面において、個人とチーム共にそのレベルは非常に高い。しかし、基本を大切にしていた。なかでも特に、苫小牧の「走塁」、「カバーリング」は大変優れていた。

走塁では、ランナーが一瞬たりともボールから目を離さず、相手にすきあらば進塁してしまう。オーバーランも大きく、凡打でも一塁まで全力疾走を怠らなかった。また、打球に対する判断力も抜群であった。

カバーリングでは、捕手から投手への返球一球一球に対し、遊撃手、二塁手が形だけでなく、しっかりとカバーに入っていた。他の各プレーでも、「早くカバーに入り、構えて待つ」という姿勢がすばらしかった。

両チーム共に、一つひとつのプレーを妥協することなく、じっくり時間をかけて練習をしているのではないかと感じた。いずれにしても、素晴らしい試合を見ることができた。

<青森山田 対 報徳学園>

両チームともに投手力がよかった。報徳は左投手で、140km前後を常時出すプロ注目の本格派。青森山田は右上手投げで135km前後。落ちるボールを多投する。共に制球力、

切れもよい。特に報徳の投手はテンポが速く、打者の立ち遅れる場面が多々あった。

<練習視察> (仙台育英高校)

大会屈指の右腕「佐藤投手」がいるということで楽しみにしていた。実際に、ブルペンで投球練習を見ることができた。体格面では、決して大きいとはいえない。しかし、バネがありそうな感じがした。投球フォームは豪快であり、球威、急速ともに度肝を抜かれた。

練習全体を見ると、守備練習では、調整とは思えないほどハードにやっていた。

4、感想

守備面では、投手、捕手が総合的にレベルが高く、さらに投手に関しては同程度の選手が数名必要であると感じた。また、各チーム共に野手の送球が安定しており、肩も強い。捕球の仕方にも基本を大切にしていた。

打撃面では、スイングが速球にも振りまけておらず、甘い球の見逃しが少なかった。また、センター返しがしっかりできるチームが多かった。

走塁面では、全力疾走や打球に対する判断力が良かったことと、常にボールから目を離さないという姿勢が素晴らしいと感じた。足も速いが、それだけではないと思う。

いずれにしても、全ての面で私が想像していた以上にレベルが高く、スピーディーであった。そして、そのレベルに到達するためには練習しかないとも感じた。今回の研修を当して、今までの固定概念に固執せず、私自身がさらに学び、工夫し、妥協しない練習をしなければならぬと強く感じた。

その他、選手、監督インタビューや試合後のストレッチング等を見ることができた。選手インタビューでは、多くのカメラ、記者に囲まれながら堂々と記者の質問に答えている姿に感心した。やはり、甲子園に出場し勝利する選手達は、心身共に鍛えられているのだと感じた。また、取材関係は、大会役員の指示により時間で厳密に区切られていた。取材終了後に多くの理学療法士によるクーリングダウンが行なわれ、その後、外部と接触することなく球場を後にした。この研修に参加し、テレビ等では見ることのできない大会の裏側も見ることができたことはとても参考になった。

5、最後に

幼少期以来久しぶりに甲子園大会を見させてもらった。スタンドに一步入った瞬間「この球場、応援の中で選手をプレーさせてやりたい。私も指揮をとりたい」と心からそう思った。改めて目標に向かって情熱が沸きあがってきた。期間中に学んだことも多く、私の野球人生の宝となった。また、引率、指導していただいた、寺沢先生、両角先生、このような機会を設けてくださった高校野球連盟には大変感謝している。今回の経験を無駄にすることなく、これからの指導に生かしていきたい。

甲子園研修レポート

阿智高校 壬生 雅教

今回の研修で初めて甲子園に行かせていただきました。今回私は、どのようなチーム作りをしていけば甲子園に出場できるのか、また選手たちの身体はどの程度の大きさなのか、そして身体能力はどれほどのものなのかなど、チームに参考になりそうなことと、甲子園はどのような雰囲気、出場したときにはどのようなことをしていかなければ勝ち上がっていけないのかなど、甲子園自体のことについてこの研修で学べたらと思い参加させていただきました。

まず選手たちの身体能力ですが、とにかくどの選手もとても高いということが印象的でした。体つきは、どの選手もさほど大きくはないのですが、筋肉の詰まった無駄のない身体をしていました。私の思い描いていたイメージとは少し違いましたが、しっかり身体を作っていかなければいけないということを改めて実感しました。しっかりした身体を作ることによって、ケガの防止や、技術の向上にもつながっていくと思うので、まずはこのことからいままでも以上に力を入れていくべきだなと感じました。身体能力については、私たち指導者がどれだけ選手のいい部分を引き出せるかにかかっているのではないかと思うので、出場校の多くの監督、コーチが行っている「選手とのコミュニケーション」をいままでも以上に多くとり、観察・指導していき、選手一人ひとりを理解することで能力を最大限活かしていけるように心がけていく必要があると感じました。

次にどのようなチームが甲子園まで勝ちあがってきているのかということについてですが、とにかく印象に残っているのはどのチームも基本にとっても忠実にプレイをしているということです。特にカバーに関してはどのチームもどんなプレイでも怠ることなく確実に行われていました。それにより、与えてはいけない余分な塁を与えることなく、ピンチを最小限に抑えていました。逆に一回でもカバーを怠ったことにより、ピンチを広げてしまったチームもありました。

この他にも、投げるといふことにとっても重点をおいているチームが数多くありました。ある高校では、シートノックの中にボール回しを多く取り入れて送球の正確さをあげていくような工夫がされていました。実際、今回の研修でみた試合のエラーのほとんどは送球エラーでした。送球の重要性を改めて実感させられました。

攻撃面については足を絡めた攻撃がとて多くみられました。特にここぞという決め所では必ずといっていいほど、エンドランやランエンドヒット、単独スチールなど次の塁を果敢に狙ってきていました。バッターもこういう場面では確実にヒットを打ち得点に結び付けていました。試合が動くのを待っているのではなく、自ら試合を動かしているという感じを受けました。やはり試合ではそういった自ら動いていかないと試合の流れももってることが難しいのだろうと感じました。

そのほかでは、今大会に関しては、すごい強打者といわれるようなホームランバッターがいたわけではなかったですが、ミート力はとても高く、打球の鋭さもどのチームもありました。特にセンター返しや、三遊間を抜けるあたりは、とても鋭く、しっかりと芯を捉えたあたりを打っていました。走塁とミート力で得点を重ね、相手のリズムを崩して得点にしていくチームがとても多く感じました。

走塁に関してもそうですが、とにかく甲子園では何にしてもスピードが速いということを感じました。投げる球、スイングの速さ、走塁の速さももちろんそうですが、攻守交替や試合と試合の間、また試合のテンポなどいたるところでスピードの速さが必要になっていました。テンポを早くすることによって自分たちのリズムで試合を行っているチームがほとんどでした。そしてその早いテンポで試合を行えるということが甲子園で勝つことの第一条件のような気がしました。速いテンポにより自分たちのリズムを崩されているようでは力の半分もだせないでしょうし、何かしようと思っているうちに試合が終わってしまうのではないかと感じました。速いテンポで試合を行うためには先ほど書いたようにすべてにおいてスピードが必要となってきます。練習からきびきびと動き、スピードを意識していれば、送球もスイングも走塁も必然的にはよくなってくると思うので練習でのスピードという部分の意識付けもとても重要だと再確認できました。

甲子園という場所についてですが、甲子園はとても暑く、そして観客の多さや応援の雰囲気など長野県大会とは大きく違いました。暑さ対策をしていかなければならないのはもちろんですが、そのほかに雰囲気飲み込まれないようにするためのメンタルトレーニングや、大きな応援にも負けないくらい大きくそして球場でも通る声も鍛えていかないといけないと感じました。どんなときもどんな状況でも動じることのない強いメンタルと、大きな声は必ず甲子園で戦うときには必要になってくると思います。当たり前のように笑顔で大きな声をだして試合を楽しみながら行うことが勝利につながっていくのだと、改めて学びました。

最後になりましたが、今回の研修では試合や練習、また様々な部分をみさせていただき、とても多くのことを学ぶことが出来ました。今後指導していくうえでも参考にできることが多くあり、私自身もいろいろ考えさせられることがありました。今回の研修で学んだことを活かして、長野県の高校野球の発展に貢献できたらなと思っています。このような研修に参加させていただきまして本当にありがとうございました。